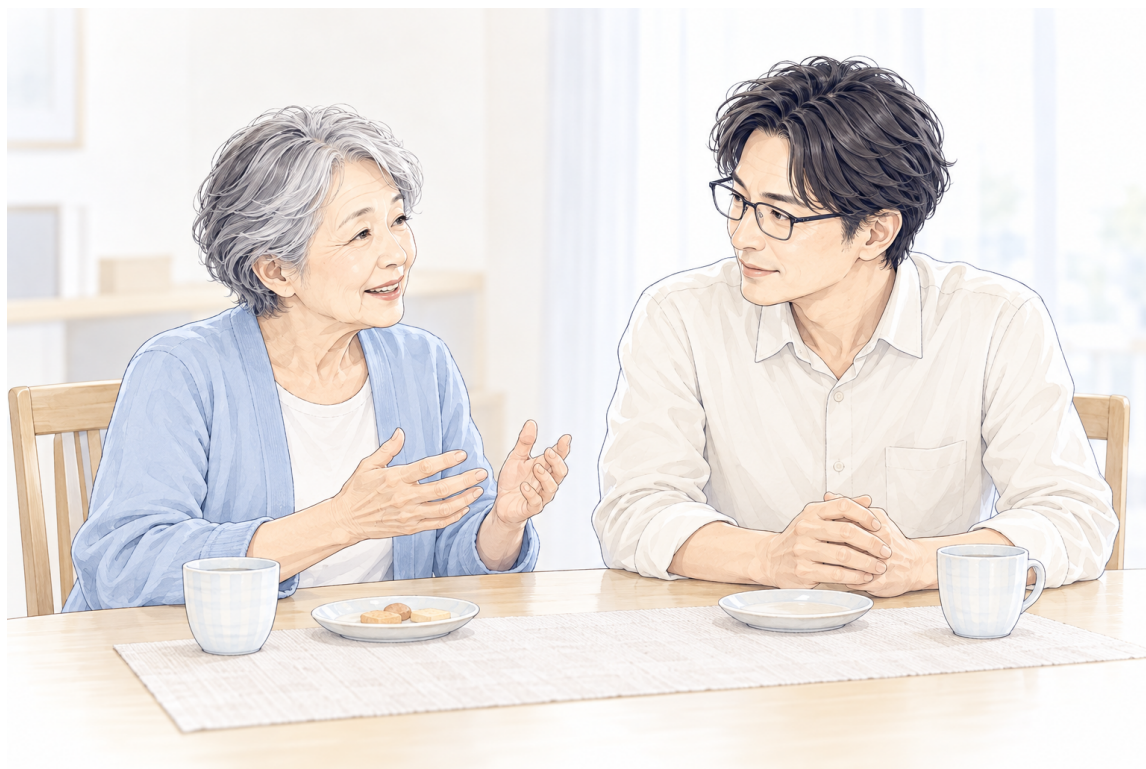


住み慣れた家で、続けたい暮らしから。

本人ができる生活行動を、現地の観察から住まいで支える。



いまでも続く、住まいの事業

2021年に始めたデザイン事業は、現在も続いています。企業で培った、行動を無理なく始め、続ける知見を住生活へ。

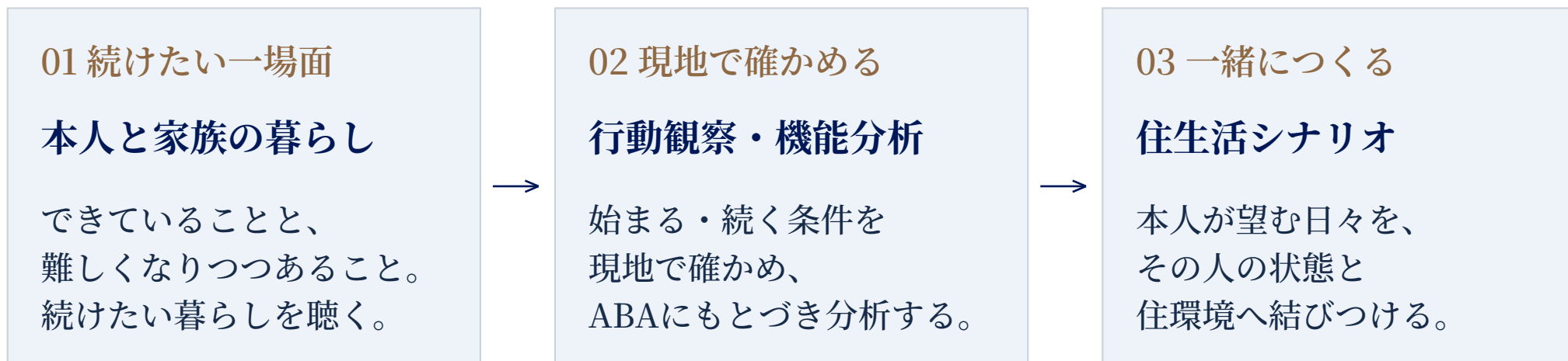
当社のBehavior engineerが、現地の生活行動を観察し、施主とご家族の住生活シナリオをつくります。

「家族と同じ食卓を囲みたい」

本人が大切にしている時間から。

現地の観察を、暮らしの設計へつなぐ。

Behavior engineerが現地で行動を観察し、ABAにもとづく機能分析から、住生活シナリオをつくります。



当時の着眼

日常の動き

「しゃがんで立ちあがる」
「歩幅を広げる」

行動が始まり、続く住環境

日光、風、開口部、壁面の工夫。
企業向けのNudge Product®を
住環境へ取り入れた当社初のケース。

できる生活行動を、日常で続ける設計。

一人ひとりの暮らしを確かめ、行動が始まり、続く住環境をつくります。

暮らしで確かめる

できていること、
難しくなりつつあることを
現地で観察する。

始まる条件をつくる

→ 現地の行動を機能分析し、
本人の状態と住環境に合う
小さな行動の入口を考える。

続く手がかりを整える

→ その人の日常に合う
住生活シナリオをつくり、
無理なく続く形を考える。

行動の機会を保つ、事業固有の設計方針

住居内の安全な行動を無理なく増やすため、原発表では「バリアフリー化は原則行いません」と記しました。この方針と住生活シナリオづくりは、現在も続いています。

何を維持し、何を变えるかは、本人の状態と安全に関わる条件を現地で確かめて設計します。

「食卓へ行きたい」を、一緒に確かめる。

当時の実際の施主のケースとは分けて、専門家に相談する前提を整理する例です。

本人が続けたいこと

家族と、同じ食卓を囲みたい。

自分でできるところは、関わりたい。

必要なときに、
支援を頼みたい。

家族と専門家で確かめること

どこで、誰と、どんな時間を
過ごしたいか。

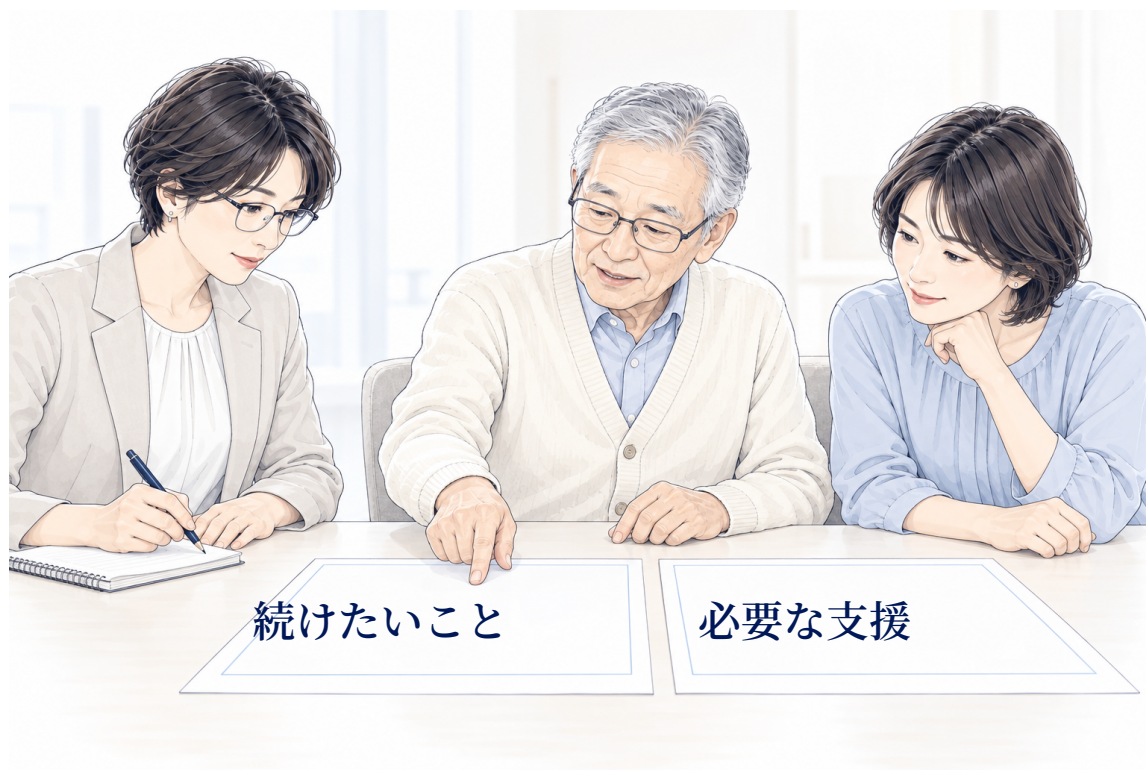
いま本人ができることと、
負担を感じる場面はどこか。

経路、足元の見え方、使う用具、
必要な介助をどう確かめるか。

「続けたいこと」と「必要な支援」を、同じ一場面で話す。

続けたい活動と、安全を支える条件を。

本人の状態と、生活行動と安全に関わる条件を、本人・家族と専門家で個別に確かめます。



本人が選び、家族と専門家が聴く。

相談する場面を描いた説明用の図です。

個別検討で参照する公的指針

国土交通省
高齢者が居住する住宅の
設計に係る指針

原発表でも、バリアフリーやユニバーサルデザインの知見と、それによって助かることを認めています。

この指針は、本人の状態に応じた設計上の配慮を検討する参照先です。

[指針を発行元で読む →](#)

2022年3月31日最終改正の掲載版

家族それぞれの事情を、話せる一場面から。

公共行動研究室®の公開資料へ。身近な場面を読み、自分たちの暮らしへ戻します。

公開資料で、近い場面を選ぶ

家庭で、分担を決めても負担が偏る。
学校で、子どもとの会話が続かない。
地域で、準備が一部の人に集まる。

それぞれの経験や、参加できる条件を聴く
ための対話を考えます。

[公共行動研究室®を開く →](#)

本人の言葉を、一場面だけ書く

例えば、「家族と食卓を囲みたい」。
次の三つを分けて、家族や専門家と
確かめたいことを持ち寄ります。

- 1 いま、できていること
- 2 負担に感じているところ
- 3 支援や条件を確かめたいこと

本人が続けたい一場面から、相談の一步を。

[暮らしと住環境の取り組みについて問い合わせる →](#)